

洞爺湖有珠山ジオパーク 10年の活動



United Nations
Educational, Scientific and
Cultural Organization



Toya-Uso
UNESCO
Global Geopark

洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会

事務局長 武川正人 事務局員 中谷麻美・加賀谷にれ・畑吉晃・西勇樹

はじめに | ジオパーク活動の10年

洞爺湖有珠山ジオパーク（北海道伊達市・豊浦町・壮瞥町・洞爺湖町の1市3町で構成）は、2008年に最初の日本ジオパークに認定され、翌2009年には世界ジオパーク（当時）に認定された。

認定当初は、日本ジオパークはわずか7地域しかなく、「ジオパーク」という言葉自体も、全く認知されていない状況であった。

しかし『変動する大地との共生』をテーマとし、地学・地質学から各分野に取組みを広げることで、一般住民のジオパークへの興味関心を高め、活動への参加が増加してきた。

ジオパークの取組みも10年が経過したことから、これまでの活動の変遷を振り返り、新たな活動への足掛かりとしたい。

1 | 主な活動履歴

有珠山はすでに活火山として多くの研究が蓄積されていたことから、ジオパークとしての第一の課題は「大地の成立ちについて、多くの住民に関心をもってもらう」ことだった。

活動の初期は主に、ジオパークという言葉の普及（パンフレットやガイドブックの製作）とハード整備（看板の設置）を重点的に行いつつ、認知度を高めることを目的としたフォーラムやジオツアーの開催を行った。

2012年からは、地学や火山に関心を持たなかった住民層への切り口として、大地の恵み（農産物）を活かした「大地の恵みプロジェクト」を開始。より広い対象に働きかけ、圏域内の事業者による経済活動への発展も見られるようになった。

表1 洞爺湖有珠山ジオパークの主なできごと

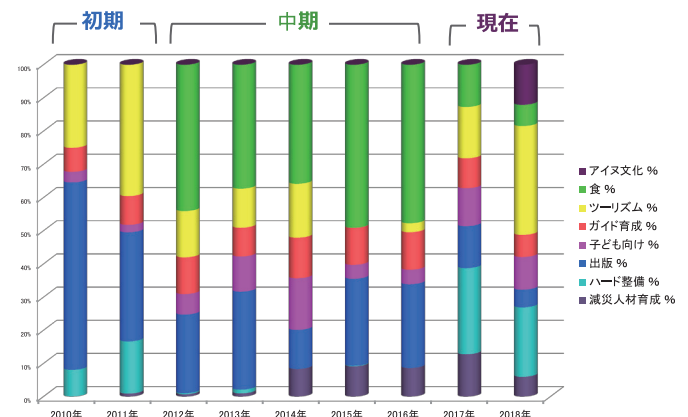
	★プロジェクト	○出版	○子ども向け	認定審査 /再審査 ◇日本 ◆世界
2006年	市町村合併(伊達市・洞爺湖町 誕生) 洞爺湖周辺地域エコミュージアム推進協議会 設立			
2007年	★ 洞爺湖有珠山マイスター制度 開始			
2008年	日本ジオパークに認定			◇
2009年	世界ジオパークに認定 認定記念シンポジウム(4回) HP整備 ○ パンフレット、マップ、ルートガイド01「四十三山」等			◆
2010年	洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会 設立 ○ ルートガイド02「金比羅山・2000年噴火遺構公園」、総合パンフレット 等			
2011年	第2回日本ジオパーク全国大会洞爺湖有珠山大会 ◎ 洞爺湖有珠山ジオパークジオマスターカード ○ ルートガイド03「西山山麓火口散策路」04「外輪山遊歩道」 05「噴火湾沿岸」新聞広告 等			
2012年	★ 「大地(ジオ)の恵み」プロジェクト(食のとくみ)開始 ★ ジオパーク・パートナー制度 開始			◇
2013年	○ ルートガイド06「昭和新山」07「洞爺カルデラ」00「変動する大地を探る」等			◆
2014年	○ 絵本『11万のうえの1日』 ○ ストーリーカード4種(りんご、ほたて、伊達野菜、とうきび) ◎ 野外学習テキスト(火山編) 等			
2015年	世界ジオパークがユネスコ正式事業化 ◎ 石ころばっち「ジオかるた」 ◎ 野外学習テキスト(縄文・アイヌ文化編) 等			
2016年	★ 解説看板ワークショップ ◎ 野外学習テキスト(植生編) ○ ストーリーカード4種(トマト、いちご、越冬たまねぎ、ウニ) ○ プチJP01 洞爺湖有珠山ジオフード 等			◇
2017年	◎ 有珠山噴火実験キット開発 ○ プチJP01 洞爺湖有珠山ジオフードVol.2 等			◆
2018年	北海道大学博物館との相互協力協定締結 ★ アイヌ語地名プロジェクト開始(2020年完成予定) 等			◇
2019年	ジオパーク学術専門員を配置			◆

2 | 活動の変遷

ジオパーク活動の普及と発展には、継続的事業と重点事業のバランスが重要となる。

事業費の変遷からは、洞爺湖有珠山ジオパークが、おおまかに「初期」「中期」「後期(現在)」の変遷を経て、事業の重点を変化させてきたことがわかる。

表2 事業費の変遷



各年度の決算額より、組織運営費及び認定審査に係る経費を除いた「事業費」の各分野の支出割合を示したものである。

【初期】 言葉の普及、基礎固め
看板設置やPRグッズ、パンフレットの発行。
有識者→住民 への知識普及。

【中期】 関係者を増やす
「大地の恵み」プロジェクトで、圏域事業者・女性層・農業者との関係を構築。

【現在】 バランス型
中期で重点的に行った事業成果が出てきている。
新しい分野への着手もしつつ、各分野が安定。
初期に製作した看板等の修繕や見直しが始まった。

一方で、子ども向け事業(教育・PR)、減災のための人づくり(洞爺湖有珠山マイスター制度)など、ジオパークのテーマである「変動する大地との共生」に必要な事業は継続し、洞爺湖有珠山ジオパークの特色として認知されている。

まとめ |

認知度の向上からはじまったジオパーク活動は、地域の課題に合せて変化してきた。中期には、地域の特性を踏まえ、地域住民の関心やニーズに対応する取組みとして重点事業「大地の恵みプロジェクト」を開始した。それが数年をかけて根付き、現在は事業所や学校でジオパーク活動に関わる入口になっている。これらのことを考えジオパークの押し売りではなく、地域のニーズに対応した取組みが効果的なこと、プロジェクト開始から、効果が表れるまでに時間を要することがわかる。

ジオパークは持続的な地域社会の発展を目指す取組みである。変化する地域の実情に合せ、数年先、数十年先を視野に入れた、事業を積み重ねていくことが重要である。

